錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第２８３号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2019

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：本番迫る合唱祭！着々と準備進む
運動部・文化部共に好成績
二面：FC東京で通訳として活躍する錦城卒業生
クリスマス＆年越し体験記 in U.S.A.

努力の歌声響かせろ

いよいよ明日は合唱祭本番！

合唱祭まであと1日、本番はすぐそこへと迫っている。1、2年生はどのクラスも練習に励み、完成度を高めてきた。また、合唱祭実行委員など裏方を担当する人たちも着々と準備を進めている。今回は合唱祭に向け活動にまい進している人々に話を聞いた。

（編集部共同取材）

本番へ向けて浜野くんの指揮に合わせて全体合唱の練習をする

全体合唱

1月8日(火)始業式後、1、2年生合同で合唱祭全体合唱曲の練習が行われた。

初めに合唱祭実行委員長の中島紗良さん（2F）から全体合唱の指揮者・伴奏者の紹介があり、全体合唱の練習時間は今回だけであることが話された。最初で最後の全体練習は楽譜を持っていない人が多く見られ、声が出ていると言いにくい合唱練習となった。

指揮者・伴奏者

全体練習を、想像していたよりはよかったと振り返るのは、全体合唱の指揮者の浜野浩宇くん(2B)。しかし、1回目の合唱では男子も女子も声が出ていなかったのを見て、みんな練習が出来ていないと感じたそう。本番での全体合唱について「クラス合唱の前にホールで発声できるのはここだけなのでしっかり歌ってほしい」と浜野くんは語った。伴奏者の大波多愛友さん(1A)は「他人任せにせず、1人ひとりがきちんと歌ってほしい」とメッセージを送る。「全体合唱は最初の曲なので明るくていい合唱がホールに響くようにしたい」と浜野くん。大波多さんは「緊張すると思いますが、楽しんで弾けたらいいなと思っています」と意気込んだ。

本番の意気込みを語る２人

委員長

11日(金)から合唱祭までの昼の放送で、昨年に引き続きクラス曲を放送している。今年は時間の都合で2年生の分しか流せないというが、合唱祭実行委員長の中島さんは「各クラスの発表をより楽しく聴いてもらいたい」と企画について語った。

また当日の注意点に関して、昨年よりも会場点呼の時間を5分短く設定しているため、時間に遅れないように行動してほしいという。

中島さんは「残りの練習は少ないですが、発表を成功させるために頑張りましょう」と笑顔で呼びかけた。

審査係チーフ

合唱祭で審査係チーフを務める浅野泉紀さん(2I)に話を聞いた。今年は審査の基準が変わり、技術点、表現点に加えて新たに「感動点」が追加される。感動点は、審査員の感動の度合いを点数にするもの。浅野さんは去年までは形式的な点数が多く、感動する歌があまり点数に反映されないことがあったと話す。また、点数を取りづらい美術クラス、書道クラスと音楽クラスとの差をなくすため、感動点が取り入れられたという。

感動点は120点満点中60点で、審査点の半分を占める。どの分野でも満点以上の点数になることもあるそう。

最後に錦城生へ「歌の技術にとらわれずに、自分が思った音楽を作り出してほしいです」とメッセージを送った。

＊＊＊

いよいよ明日は合唱祭。本番では練習の何倍もの声量で会場を包もう。

歌の技術にとらわれないで

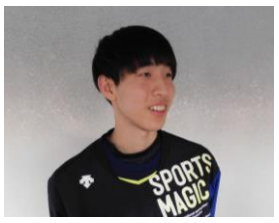
寒さに負けない！

男バレ、将棋躍動

男子バレーボール部

12月23日（日）に南関東10カ所行われたウインターカップで優勝した男子バレーボール部。部長の山下泰くん（2I）に話を聞いた。

「この大会は連続して優勝していたため、今回も優勝したいと思っていた」と山下くん。初戦はミスの多さから自分たちの実力が出せなかったが、その後は声出しで徐々にモチベーションを高め、計4試合全てストレート勝ちで優勝を掴んだ。チームの強みは元気と攻撃力、1点取りたいときに勝ち切れること。課題はレシーブ力で、普段はレシーブ練習に重点を置いている。



「応援ありがとうございました」と山下くん

2年生はあと半年ほどで引退となる。後輩へ「代が変わったら先輩としての自覚を持ち、頑張って欲しい」と期待を寄せた。

次の大会は春に行われるスプリングカップ。優勝を目指し活躍に回り、その中で2位となった。

金さんは「初戦の相手は私と同じ『居飛車』という戦法だったため、戦いにくかったです」と振り返る。敗者復活戦の最終戦を「相手との経験差を感じる試合でした」と話す金さんは、自分自身を終盤にかけて徐々に強くなるタイプと分析。次の春の東京予選に向けて「どんな相手にも対応できるように、序盤に踏ん張る力をもっとつけていきたいです」といきいきと今後の目標を語った。

（蓮・槿）

将棋部

12月23日(日)に山梨県で関東大会女子の部が行われ、金ユリさん(1L)が出場した。金さんは初戦で大会優勝者とあたり敗れたが、敗者復活戦に回り、その中で2位となった。

真剣な眼差しで対局に臨む金さん(写真右)

金さんは「初戦の相手は私と同じ『居飛車』という戦法だったため、戦いにくかったです」と振り返る。敗者復活戦の最終戦を「相手との経験差を感じる試合でした」と話す金さんは、自分自身を終盤にかけて徐々に強くなるタイプと分析。次の春の東京予選に向けて「どんな相手にも対応できるように、序盤に踏ん張る力をもっとつけていきたいです」といきいきと今後の目標を語った。

（蓮・槿）

保健室に新任「気軽に立ち寄って」

保健室に新しく横田舞子先生が赴任した。錦城について「真面目で頑張る子が多いように感じました」と話す。

横田先生は学生時代にＮＰＯ法人を立ち上げ、学生向けの就職イベントを開いたことがあるそうだ。「人を支援することが好きで始めただけでしたが、人とのネットワークが広がりました」と当時を振り返る。また製薬会社でメンタルにかかわる薬の携わっていたそうで「その経験を活かして生徒の心のケアもしたいです」と横田先生。最後に錦城生へ向けて「気軽に立ち寄って、日々の悩みをリフレッシュしに来てくださいね」と温かい言葉をかけた。

（槿）

誰もが楽しめる修学旅行に

ＰＲ係　石塚先生

チーフの石塚友規先生は「雪質はすごくいいし広いので、初心者も上級者も楽しめると思う」と話す。また、海外からも多くの観光客が訪れるため、錦城生が行く日も混雑が予想される。

朝食、夕食はホテルでのバイキング。昼食は安比高原内のフードコートで各自が好きなものが食べられる。お土産を買えるところは3か所あり「小岩井農場と手作り村は荷物を送った後に行くので、自分で持って帰ることになる。リュックサックを持ってくるのがオススメ」とアドバイスした。

気を付けて欲しいこととして「初日に遅刻をしないこと」を挙げた。電車は遅延の可能性もあるので余裕を持って到着できるようにしよう。

1月21日(月)、23日(水)、25日(金)の3日間にわたり、昼の放送で2学年の先生方へのインタビューが行われる。この企画はＰＲ係によるもので、チーフの森田将真くん(2L)は、「スキーにまつわるエピソードや、安比高原の様子など様々な質問をする予定です」と話した。

「安比に行きたくなるような楽しい放送にします」

先生方は当日発表される。「楽しい放送にするので、ぜひ聞いてください」と呼び掛けた。

（泰・和）

吹奏楽部、アンサンブルで金賞４つ

打楽器＆ユーフォニアム・テューバ

12月27日(木)に八王子市芸術文化会館いちょうホールで行われたＴＡＭＡアンサンブルフェスタで、打楽器五重奏は金賞、ユーフォニアム・テューバ四重奏は金賞に加えて、特別賞の尚美ミュージックカレッジ賞を受賞した。

打楽器五重奏のリーダー瀧晏珠さん(2I)は、昨年金賞を逃して、一緒に出場した先輩から「来年はリベンジして」と言われたそう。「中学から吹奏楽をやってきた努力が実ったと思えました」と満足そうに話した。ユーフォニアム・テューバ四重奏リーダーの三井明日香さん(2I)は「まさか金賞を獲れるとは思っていませんでした」と喜びを語る。

「去年のリベンジが果たせました」

2人は一緒に出場したメンバーに「遅くまで練習してくれたことに感謝したいです」と言葉を送った。

サックス＆ホルン

1月5日(土)、府中の森芸術劇場で第42回東京都高等学校アンサンブルコンテストが開かれた。サックス四重奏とホルン四重奏に出場し、金賞という結果を収めた。

「今までの練習の成果がでました」

サックス四重奏リーダーの鳥井晴日さん(2L)は「昨年は銀賞で悔しい思いをしたのですが、今までやってきた成果が出て嬉しいです」と笑顔。サックスの4人は練習中、お互いに励ましあい、気合のＯＮ・ＯＦＦを意識したという。

ホルン四重奏リーダーの榛葉結美さん(2A)さんは「講師から良い賞を獲るのは難しいと言われたのですが、金賞を獲れて嬉しいです」と話す。

冬休み中は毎日練習していた言う2人。ホルンを演奏した4人は、モチベーションを保つため、時々ベランダや出て決意を叫んでいたそうだ。

最後に2人は今回の結果を「支えてくれた全ての人のおかげです」と感謝の言葉を話した。

（英・巴）

むらさき草

この「むらさき草」というコラムを書くのも結構大変だ▼自分の言いたいことが読者に正確に伝わるように、書いては編集委員の仲間に見せ、書いては別の人にも見せを繰り返す。返された原稿が赤い添削だらけで、心が折れそうになることもある▼あと一文、結びが決まれば完成なのにその一文が思いつかない。結局下校の直前にようやくぴったりの言葉を見つけた時もあった▼プレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、「編集委員皆が書いている。一人だけ逃げ出すわけにはいかない」とパソコンに向かう▼将来の夢に悩む友人を応援したいと、このむらさき草を書いたことがある。上手く伝わるのか不安だったが、完成した新聞を送ると、夕方彼女のＬＩＮＥのホーム画面が1年前に撮った私との写真になっていた▼メッセージ欄には「届いたよ」という一言と新聞の絵文字。直接感想を聞けたわけではなかったが、思いが伝わったと感じ嬉しかった▼通っていた塾をやめることにした時、ずっと担当してくれていた先生に「むらさき草」が載った新聞を渡した。最後の通塾日、感想の手紙をもらった。先生がちょうど自分の進路について迷っていたこと、その時にむらさき草を読んだことが書いてあった▼「グッと来ました。最後の5行を何度も読み返しました」という一文を読み、大変だったけどあきらめずに書いてよかったと思えた▼「むらさき草」だけでなく、すべての記事を同じ思いで作っている。締め切り前は本当に逃げ出したくなる。そう思っても書くのをやめられないのは、読んでほしい人がいるからだ。紙面をちらりと眺めてくれている人を見かけるだけで嬉しくなってしまう▼新聞を通して、高校生の私たちでも「伝える」ことができるのだと学んでいる▼今回のむらさき草はどう結ぼうか。印刷時間まで粘ってみる。（加）

錦城 卒業生「好きな事を貫くことが大事」

元プロサッカー選手に取材

今回は8月後半と10月後半の2度に渡り、41回生である元プロサッカー選手の伴和暁（ばん・かずあき）さんに取材した。現在の仕事であるFC東京での英語・中国語の通訳の話から、海外でのプレー経験など多岐にわたってお話を聞くことができた。（蓮）

「勉強することは、視野を広げることにつながる」と伴さん

現在は通訳として活躍

現在通訳の仕事は3年目で、外国籍選手のサポートをしている。日本語が少しわかる外国籍選手にはサポートしすぎないなど、選手によって距離感をうまくつかむことが大切だという。時と場合によって伝える事と伝えない事があるが「全部伝えてほしい」と要求する選手もいるそうだ。「日本語を聞いて同時に英語、中国語にする同時通訳をするため、瞬時に考える必要があり、通訳の仕事に就いて頭の回転が速くなりました」と話した。

通訳の仕事を始めた頃は、英語で表現できない語句があり、仕事に不安を持っていた伴さん。そのため、帰宅後には英語がネイティブでない外国籍選手に対しても伝わるような英語を考えたり、使用頻度が高い言葉のリストを作ったりしていた。今では1年目にやったことが身についたため、楽しく仕事ができていると笑顔。英語の知識は大切だが、日常生活で使うのは中学英語+アルファ程度であり、それよりもコミュニケーションをとろうと試みることが大事だと語る。しかし、今でも英語の勉強は欠かしていない。

仕事の喜びは、チームが試合に勝ったときと自分の頑張りが他人に認められた時。試合に負けると落ち込むところは、選手の頃と変わらないと笑う。

伴さんプロフィール

1987年に山梨県に生まれる。小学4年生からクラブチームに所属し、錦城では当時のフットサル同好会に所属。大学時代は仙台大学サッカー部に所属し、一度サッカーから離れたのち上海体育大学院サッカー部でサッカーを再開。その後エストニア、ポーランド、カンボジアの3か国でプロ選手として活躍した。

錦城での高校生活

伴さんは兄の影響でサッカーに出会い、4、5歳からボールを蹴り始める。その後小学校で行われているサッカーチームに入ったのち、小学4年生の時にクラブチーム「関前FC」に所属した。

錦城生時代は「錦城の生徒にしてはやんちゃ」だったという伴さん。クラブチームに入っていたが、高校の友達を作るためフットサル部に入部。しかしクラブチームの活動が忙しく、ほとんど参加できなかったという。

錦城での思い出は、後夜祭で友人とブルーハーツのコピーバンドを作って歌ったこと。また、今では英語の通訳を仕事にしているが、高校時代は英語で学力補充の対象になって補習を受けたことも。2・3年時の担任だった中村先生には、毎回テスト前に、夜遅くまで分からない所を教えてもらうなど、とてもお世話になったと懐かしんだ。

錦城在学時の伴さん(写真左)

高校3年生になり、推薦を考えてプロチームや強豪大学サッカー部の実技テストを受けたものの、思うような結果が得られず一般受験に切り替えることに。サッカー部が強豪だったことや、関東ではない地域に行きたいという想い、1人暮らしの憧れもあって仙台大学体育学部体育学科スポーツマネージメントコースに入学。サッカー部に入部した。

仙台で過ごした大学時代

憧れの1人暮らしは、大学が郊外にあるため人に会うことが少なく、ホームシックになったことも。仙台での暮らしで、どこにでもお店があり、欲しいものがすぐに手に入る東京の住みやすさに気づいたそう。1人暮らしだと誰も家事などをしてくれないため、全て自分でやらないといけないことが大変だったという。帰宅して1人で「ただいま」というときに寂しさを感じたが、大学が始まるとサッカー部の友達がで寂しさを紛らわせることができた。「大学時代を過ごした仙台は第二のふるさと。今でも大好きな場所です」と仙台愛を覗かせた。

サッカー部に入り、今までは少人数で仲の良いクラブチームに所属していたため、100人を超える部員数と、Tシャツに大きく自分の名前を書くような伝統、先輩後輩の上下関係にカルチャーショックを受けた伴さん。サッカー推薦で特待生として入学した人はAチーム、伴さんのように一般受験で入学した人はBチームに割り振られたが、伴さんは実力を認められ、最初の練習でAチームに入ることができた。結果公式戦も最初に出場した。

大学では1日2コマほど実技体育の授業があり、その後部活でサッカーをするため、かなり体力を使ったという。

また、ここで体育の教員免許も取得した。

錦城生へのエール

後輩に向けて「プロを目指している人は、刺激的で得られるものも多いので海外に行く経験をすべきだと思う」とアドバイス。

錦城生の印象は「真面目」。登校時に単語帳を見ている姿をよく見かけるからだという。「人の話を聞くことと勉強することは、視野と選択肢を広げることにつながる。勉強はできるに越したことはない。あと、自分の好きなことをやった方が幸せになれるので、好きなことをあきらめずに貫くことが大事。頑張ってください」とエールを送った。

サッカーには頭の賢さも必要

サッカーを離れ、中国へ語学留学

大学在学中、各地で子どもたちに教育、講演をしている方の話を聞いて感動し、その価値観に共感する。それがきっかけで一時はサッカーよりもビジネスや起業に興味を持ち、その方面で大きな影響力を持った人になりたいと考えていた。さらに、当時友人と共にビジネスをしており、東北楽天ゴールデンイーグルスにインターンシップへ行った経験もあるという伴さん。

卒業する頃にはサッカーから離れることを決意し、就職活動を経て企業の内定を獲得した。しかし「わくわくする方へ行きたい」という思いから、急遽中国上海体育学院に国費留学生として進学することを決める。これはサッカー留学ではなく、勉強での留学だった。

中国ではベトナム人や韓国人をはじめ、アメリカ人、イギリス人など多国籍の寮で生活。日本人は伴さんを含めて4人おり、うち3人が仙台大学の卒業生だったという。入学後は1年ほど語学学校で中国語を習得した。中国での生活では、日本人のモラルの高さを実感したと話した。

サッカーを再開、海外のプロデビュー

サッカーから離れていた2010年にワールドカップ南アフリカ大会が開催される。かつてクラブチームで共にプレーした仲間が出場しているのを見て、またサッカーをしたいという気持ちが湧き、再開。必死にフィジカルトレーニングや筋力トレーニング、練習をして体を取り戻した。「ブランクもあったが、サッカーには頭の賢さも必要なので、勉強した経験も良かった」と振り返る。大学院では部活としてサッカーをしていたが、プロとしてキャリアを積みたいと、自分のプレー集と履歴書を作成して300ほどの海外のプロチームに送った。

この行動の結果、エストニアのチームで初めて「プロ選手」になった伴さん。エストニアはマイナス20℃まで気温が下がることもあり、とても寒かったことが印象に残っていると話した。

海外のチームで活躍する(写真右)

プレーしたどのチームにも思い入れがあるが、特にプロ最後の1年間で所属したカンボジアのチーム「ナガワールドFC」が思い出に残っているそう。結果はリーグ戦準優勝。優勝こそできなかったものの、やりきったと思える1年になったと語った。翌年、帰国のタイミングで英語と中国語の通訳としてFC東京に所属し、現在に至る。

アメリカで過ごす年末年始

12月21日(金)から1月4日(金)の期間、カリフォルニア州でアメリカホームステイ体験プログラムが行われた。

このプログラムに参加した中村朱里さん(1A)、仲上穂香さん(1B)、髙橋茉子さん(1H)、橋本莉佳子さん(1H)、嶺彩香さん(1H)の5人から話を聞いた。

今回のプログラムを通して髙橋さんは「滞在4、5日くらいで現地の人の言葉を理解できるようになりました」と口にする。現地の英語は日本で習う英文法とかなり違うため、苦労したと振り返った。

老人ホームを訪れ折り紙を教える錦城生

アメリカ人の生活ぶりについて聞くと全員口を揃えてスケールの大きさを挙げた。仲上さんは「屋根のない観覧車があったり、移動中の車内での音楽が桁違いのボリュームだったりと驚くことばかりでした」と話す。他にも「食べ物はたくさん買ってたくさん捨てるのが日常茶飯事」と嶺さん。日本では想像できないような私生活に度肝を抜かれたそうだ。

また留学期間はクリスマスと重なっていたため、アメリカは大盛り上がり。中村さんは「プレゼントの量が多く、しかも高価な品物ばっかりだったのでびっくりしました」と語った。

今後に向けて橋本さんは「英語が喋れていればもっと楽しかったと思うので、英語をさらに上達させて大学でも留学をしてみたいです」と意

小平子ども新聞の贈呈式に参加

小学生から紙面を贈呈された市長

12月27日(木)、編集委員も協力した「小平こども新聞」の市長贈呈セレモニーが小平市役所で行われた。今まで子ども新聞に携わってきた小平市役所広報担当の髙木香織さんは「小平でもオリンピックを盛り上げるために、子ども達に新聞作りをしてもらいました」と子ども新聞の意義を語る。企画が一通り終わっての感想を聞くと「ようやく形にすることが出来たので、嬉しい限りです」と表現。参加した子ども達がとても協力的だったと髙木さん。作られた紙面は市内の小学生に配られたそうだ。

最後に「いい新聞を作りあげることが出来たので、今年も何かしら子ども達に体験させてあげたいです」と抱負を口にした。（槿・李）

聖夜に響く弦楽器の音色

12月20日(木)、ルネこだいら中ホールで室内楽部によるクリスマスコンサートが行われた。

第1部は『赤鼻のトナカイ』などのクリスマスにちなんだ曲や、バッハ作曲『G線上のアリア』などを息の揃った演奏で披露した。

第2部は1年生がアラン・メンケン作曲『A Whole New World』、2年生が宮川泰作曲『宇宙戦艦ヤマト』を演奏し、観客を楽しませた。また、チェロとコントラバスだけで構成された有志がリチャード・ロジャース作曲『私のお気に入り』を、4人の有志がヨハン・パッヘルベル作曲『カノン』を演奏した。

譜面台には部員手作りの貼り絵が

第3部は演奏の合間に寸劇を挟み、ストーリー仕立てでさまざまな曲を披露。姉のアリーと妹のサラがサンタを探すという内容で、ディズニー映画『美女と野獣』のキャラクターや、2匹のトナカイと出会いながら物語が進む。劇の途中、女王様役の生徒のソロヴァイオリンを筆頭にヴィヴァルディ作曲「四季」より第4曲『冬』を披露すると、大きな拍手が起こった。クライマックスには、留学生のクルーゼルム・イネスさん(元1E)が、サンタに扮して登場。「メリークリスマス！素敵なクリスマスを迎えて」と言い、会場を沸かせた。アンコールの『ジングルベル』では観客も手拍子をし、会場が一体感に包まれた。（菘）

大会報告

吹奏楽部
12月27日(木)
▽TAMA
アンサンブルフェスタ
打楽器五重奏　金賞
ユーフォニアム・テューバ四重奏
金賞・尚美ミュージックカレッジ賞

1月5日(土)
▽第42回東京都高等学校
アンサンブルコンテスト
サックス四重奏　金賞
ホルン四重奏　金賞

生徒会動静

1月9日(水)
合唱祭実行委員会
1月11日(金)　HR委員会
合唱祭実行委員会
体育学芸委員会

1．8～1．15